



MEDICAL OFFICE

医療の最前線からのワンポイントアドバイス

看護医療学部 教授

加藤眞三 かとうしんぞう

患者学のすすめ—患者が創る新時代の医療

「患者は病気や検査のことなんか知らなくて良い」「治療は医者任せ、医者ということ聞いていけば良い」

こんな態度の医師に閉口した経験のある向きも多いのではないだろうか。一方で、「医療のことは分からないからお任せします」「どんな病気であっても治してほしい」と、神のような存在としての医師像を望む声も多い。

今までの医療は、医療者が患者にとつて最善と思われる医療を提供することを基本としてきた。そのような患者と医師の関係性をバターナリズム（父権主義）という。半世紀ほど前、「パパは何でも知ってる（原題 Father Knows Best）」という米国のテレビドラマが放映されていた。「最善の解答は父が知っている」とされ、家族は父に支配されていた。同様に、医療の専門家として知識と技術を持つ医師は、患者の前で父親役を演じてき

た。「Doctor Knows Best」の時代だ。

しかし、時代は移り変わり、社会は成熟する。成人となった子供が独自の価値観を持ち始めると「パパは子供の気持ちから分らない」との状況が生じる。個々の患者の価値観と治療の選択肢が多様化すると、医療の解答は多様性を持つことになる。成熟した社会における新しい時代の医療では、患者と医療者の対話が必要になる。医療者は医療の専門家として病気や検査・治療に関することを伝え、患者は自分の好み・生き方や価値観を伝えて、お互いにその情報を共有し解答を見つけ出す努力が求められる。

また、慢性病の時代を迎えると、患者は病気を抱えて生活するため、病気についての知識を身に付けなくてはならない。高齢化社会で医療費が膨大となり、医療崩壊を迎えており、治療よりも予防が重要になる。インターネットにあふれる

健康情報の中から情報を取捨選択しなければならぬ。

書店には医療不信をおもむく本があふれ、まるで検査や治療は何でもかんでも悪く、医師は信用してはいけないかのように伝えられる。だが、医療不信で不幸になるのは、患者と医療者の双方である。患者と医療者が不信ではなく、協働する関係性を創りあげることが大切なのだ。

私は患者と医療の関係性を研究する学問を「患者学」と定義し、研究・運動している。独立自尊の精神を持ち、情報リテラシーと対話力を備えた患者が、新しい時代の医療を創るだろう。福澤諭吉の唱える独立自尊の精神が、今ようやく医療の世界で求められる時代を迎えているのだ。慶應義塾で学んだ皆さんが、医療者との協働関係を築き、良き医療者を育て、新しい医療を創る動きに参加することを期待する。